

十一面観音像 重要文化財

高さ 190.5 センチメートルのこの像は、しばしば慈悲の女神と呼ばれる仏教の菩薩観音像である。8 世紀後期の作である。観音は人々を病気から守り、食べ物や富を確保する手助けをされると考えられている。11 の顔は様々な表情をしているが、一番大きな顔は慈悲と静けさを醸し出している。11 個の顔の意味には諸説あるが、悟りに至るまでの道筋の 10 の段階を表しており、11 番目の一番上についている顔が悟りを開いた状態を示している、という解釈もそのひとつである。

この観音像は、台座を含めて、カヤ（榿）の一木から彫り出されている。カヤは常緑樹であり、ジャパニーズナツメグとも呼ばれる。この像はつくられた当時のままの姿を保っており、大きな修復は加えられていない。彫りには精緻な職人の技が示されており、特に衣のゆったりとしたひだや、胸の上のあたりに見られるレースのような彫りが優れている。